『言語社会』執筆要領補遺

一橋大学大学院言語社会研究科紀要編集委員会　　2023 年 4 月

別に示した執筆要領に加えて、若干の注意と原稿の書式および表記上のガイドラインを以下に示します。

１◆投稿上の注意：補足

1.1 原稿データファイル提出について

Word などパソコンソフトの注釈機能を使って原稿を作成することが多いと思われますが、その際には「文末脚注」に統一してください。電子データの提出に際して、註やキャプションは本文と同一ファイルでも問題ありません。

1.2 図版等について

図版を Word ファイルに貼り込んだまま提出すると画像が劣化する場合があるので、図版は元のデータを別ファイルとして提出してください。図版の挿入位置やレイアウト等は、プリントアウト上で示してください。（Microsoft Word での文書・画像処理については、4◆も参照。）

1.3 複数原稿の投稿について

『言語社会』では、限られた誌面の中でなるべく多くの院生諸君に掲載機会を配分するため、同一の個人による複数の「論説」投稿は認めませんが、投稿ジャンルが異なる場合には複数の投稿を受け付ける場合があります。ただし、複数の投稿原稿がともに査読を通ったとしても、誌面が足りない場合は複数投稿のいずれかを遠慮していただくことになりますので、そのむねご承知おきください。

1.4 「翻訳」および「資料」カテゴリの投稿について

『言語社会』では、できるだけ多様な学術研究のあり方を包摂すべく、翻訳、資料等の投稿を認めていますが、研究科の紀要という性格からして、これらの投稿も学術研究上意味のあるものに限ります。また、「論説」「研究ノート」と同じく、学生投稿については査読を行います。したがって、「翻訳」および「資料」カテゴリで投稿のさいは、必ずそれぞれの原稿の学術上の意義に関する詳細な解題および註釈を付してください。

1.5 アブストラクト（要旨）の掲載について

要旨は原則として掲載しませんが、論説に関しては、希望がある場合には欧文アブストラクトを載せることも可とします。その場合は、必ず指導教員と相談の上ネイティヴ･チェック等みずからの責任において済ませてください。希望者には、論説掲載決定後に詳細をお伝えします。

1.6 査読について

査読は 4 段階評価（A～D）の点数制（10 点満点）で行われます。査読（一次）の基準は以下の通りです。

採　　用：二人の査読委員双方が B 以上をつけた原稿。

要再査読：二人の査読委員双方が C 以上をつけ、且つ「採用」ではない原稿。

不採 用：二人の査読委員双方あるいは一方が D をつけた原稿。

再査読において、二人の査読委員双方あるいは一方が D をつけた場合は、「掲載不可」が確定します。それ以外の原稿についても、許容本数の関係からすべてを掲載できない場合、合計点数によって最終的 な掲載可否を区切ることがあります。このケースにおいて最終的に「掲載不可」となった原稿が次年度 の紀要に自動的に「掲載可」となる措置はとりません。

評価	点数	評価基準
A	10 点	学術的な価値があり、修正不要（掲載可）
B	8〜9 点	学術的な価値があるが、多少の修正が必要（掲載可）
C	3〜7 点	大幅な修正が必要（修正の結果次第で掲載も可）
D	0〜2 点	学術的な価値にとぼしい（掲載不可）

※ 審査結果が大きく割れた場合（B 以上と D）でも、第三者による審査などの措置はとりません。

２◆本文書式について

原稿本文のスタイルに関しては、章立ても含め、大枠においては統一基準を設けませんが、細かい表記に関して、最低限以下の諸点につき基本的な統一をはかります。やむをえない理由で以下の原則から逸脱する表記が必要な場合は、ご相談ください。また、以下には、本文が和文の場合と英文の場合の原則のみ載せますので、他の言語で本文を執筆する場合は、指導教員と相談してください。

2.1 和文の場合

１段落

段落間に空白行は入れません。各段落冒頭は 1 字下げます。ただしカギカッコ「 で段落がはじまる場合は 1 字下げを行いません。

２句点・読点など

縦・横組みを問わず、句点・読点を用い、横組みでもコンマ・ピリオドは用いません。文中に挿入文をダッシュ――ではさみこむ場合は、全角ダッシュ二つぶんとします。

３数字

縦書きの場合は漢数字を用います。原則として、日付・年号を含め序数的なものは「〇」を用い（二〇〇八年、一〇月二五日、九〇年代）、計量的なものは「十」「百」等を用います（四千年間、百五十人、三百六十五日）。横書きの場合は、半角アラビア数字を用います。

４註

論文の終わりにまとめます。註も本文と同じ書式で記入して下さい。本文において註記号が句読点、引用符等と同時に用いられる場合には、それらの前に註番号を挿入して下さい。縦・横組みを問わず、註番号はアラビア数字を用います（既刊の号参照）。

本文中で引用された文献については、それぞれ註番号をふって文末註をつける旧来の方式と、註番号はふらずそのつど出典を略記し、原稿の最後に文献表をつける方式の二つが、一般によく用いられます（下記の「英文の場合」および「書誌情報の記載」の英語文献の項を参照）。社会学や言語学の領域では後者が一般的のようです（たとえば、日本社会学会『社会学評論』スタイルガイド https://www.gakkai.ne.jp/jss/bulletin/guide.php 等を参照のこと）。

註や文献表等の書き方は、専門分野の慣習等により異なりますので、指導教員と相談のうえ、方式を選択してください。文献表を用いる場合、文献表はすべての文末註を記載した後に付してください。なお、文献表に記載する文献は、引用ないし直接言及されたものに限り、それ以外のいわゆる「参考文献表」はつけないものとします。

５引用

本文中で外国語文献からの引用を行う際は、必ず日本語に翻訳してください。引用箇所の原文を載せる必要はありませんが、載せたい場合は註に記載してください。論旨との関係上、本文中に原文を載せる場合でも、同じ本文中もしくは註に必ず日本語訳を記載してください（ただし論旨との関係上、日本語訳が完全に不要であると判断される場合は相談に応じます）。

６体裁

査読の結果、掲載可となった場合、最終原稿を提出していただきますが、その際、原稿冒頭にタイトル（およびサブタイトル）と氏名を必ず記してください。学年や学籍番号、ゼミ名等は記さないでください。また、原稿（註も含む）の最後に、（ひらがな表記の氏名（姓と名の間に全角スペースを入れる）／所属課程）の要領で肩書きを書いてください。

例：（げんしゃ たろう／博士後期課程）

なお、便宜のためファイルにはページ番号を挿入してください。

＊投稿時の体裁については、執筆要領を参照してください。

2.2 英文の場合

英語の論文の書式にはいくつかの方式があり、国、専門分野によって使われる方式が異なります。ここでは一例として、米国の人文学系の学術誌で広く使用される MLA 方式の例を挙げておきます（詳細 は MLA Handbook を参照してください）。自分の論文に適切な書式については、指導教員の指示を受けてください。

１段落

段落の冒頭は 5 字分（タブ設定 2.5 字分）スペースを空けます（これをインデントと言います）。章の最初はインデントを行わない書式もありますが、当紀要では行います。

２註

論文の終りにまとめます。引用した文献については、上記 MLA 方式においては、一つ一つ註番号をつけて註釈することはしません。本文中で、引用文の後に作者の姓、題名の一部、頁番号を () に入れて示します。本文中に作者名あるいは題名がすでに書かれて明らかな場合は、それらは省略できます。

例：It has been suggested that “the problem of the Twentieth Century is the problem of the color-line” (Du Bois, Souls, 5).

：W. E. B. Du Bois predicted that “the problem of the Twentieth Century is the problem of the color- line” (Souls, 5).

：In The Souls of Black Folk, W. E. B. Du Bois predicted that “the problem of the Twentieth Century is the problem of the color-line” (5).

文献の詳細情報は、文献表にまとめて論文末尾におきます。文献表は、引用・参照した文献を著者の姓のアルファベット順に並べて記載します（個々の文献データの記載の仕方については、以下の「３◆ 引用、および書誌情報の記載のしかた」を参照）。文献表は、註のまとまりの後に付してください。なお和文の場合と同じく、引用もしくは直接言及されたもの以外の文献に関するいわゆる「参考文献表」はつけないものとします。

３体裁

査読の結果、掲載可となった場合、最終原稿冒頭にタイトル（およびサブタイトル）と氏名を記してください。学年や学籍番号、ゼミ名等は不要です。また、原稿（註も含む）の最後に、（日本文字表記の氏名（姓と名の間に全角スペースを入れる）／所属課程）の要領で肩書きを書いてください。

例：（言社 太郎／M.A. student）（モーツァルト　　アマデウス／Ph.D. student）

なお、便宜のためファイルにはページ番号を挿入してください。

３◆引用、および書誌情報の記載のしかた

以下は、本文中で他言語を引用する場合の指示のしかた、および、書物等のデータの記載のしかたについてのガイドラインです。迷う場合の参考にしてください。以下に挙げたスタイルを単純にあてはめることができない、あるいは望ましくない種々のケースも想定されますので、原稿の性質に応じて適宜指導教員あるいは編集委員に相談してください。

また、以下には、和・英・独・仏・露・中・朝のケースについてしか記載していません。他の言語を用いる場合は、適宜指導教員の指導を受けてください。

3.1 和文の引用・日本語文献表記

１引用

改行せずに本文の中で和文を引用するときは「 」の記号を使います。しめくくりの 」の前に句点は入れません。引用文を省略したり、説明を補ったりする場合は、〔 〕の記号（「キッコー」と言います）を使います。省略記号の点は和文では 6 つ（三点リーダー2 つ）です。原則として前後の〔……〕は不要です。また、引用中にさらに引用もしくはセリフ等が入る場合は、ともに「 」を用いておいてください。

例：「本書は〔……〕アンシャン・レジーム期の社会の文化的亀裂をあつかったものである」

「第一日に神は「光あれ」と言われた」

一方、引用文の前後を改行する場合は、引用部分全体を 1 字下げにし、前後に空白行を 1 行入れます。引用文は「 」でくくる必要はありません。引用文の字体や字の大きさは本文と一にします。引用文が原文における文の途中を切り取っている場合は前後に〔……〕を入れます。引用部分の冒頭が原テクストにおいて「文頭」であっても、段落の半ばからはじまる文の場合は、引用文の冒頭に〔……〕を入れてさらに 1 字下げるケースと、〔……〕を入れずに段落頭を下げないケースがあります。

２作品名・雑誌名

『 』に入れて下さい。ただし、視聴覚媒体の作品名等に関しては、それぞれの慣習等にのっとり各自で統一をはかってください。

例：『エセー』《モナ・リザ》

３雑誌所収論文・詩集所収の詩・章の題名など

日本語のものは「 」に入れて下さい。例：『悪の華』収録の「小さな老婆たち」４人名

西洋人の人名をカタカナ表記する場合、原則としてファースト・ネームとファミリー・ネームを全角中黒（・）で結び、原綴のハイフン（-）は、半角等号（=）にかえます。複数の著者、訳者がいる場合は、スラッシュ（／）で結ぶ。

例：ジャン=ポール・サルトル／アルベール・カミュ

５和書単行本への参照

執筆者名、書名、（翻訳者名)、（叢書名、巻数）、出版社名、（刊行地名※県・市町村等、とくに要記載と思われる場合)、刊行年、頁数の順とします。刊行年は縦書きの場合は漢数字、横書きの場合はアラビア数字。頁数も、縦書きの場合は漢数字＋頁、横書きの場合はアラビア数字とします。執筆者名と書名の間、書名と翻訳者または出版社の間、叢書名と巻数の間には読点を入れません。

例：松原秀次『フランス語の冠詞』白水社、1978、p. 154. 【横書き】

ヴィクトル・ユゴー『ノートル＝ダム・ド・パリ』辻昶／松下和則訳、『ヴィクトル・ユゴー文学館』第５巻、潮出版社、二〇〇〇年、三〇頁。【縦書き】

６雑誌論文等への参照

執筆者名、論文名、（翻訳者名）、収録雑誌名、巻号、出版社名／発行機関名（学会誌等の場合）、（刊行地名）、刊行年、頁数の順とします。読点の位置については同上。

例：中川久定「『ダランベールの夢』三部作の言外の主張」、『思想』第 828 号、岩波書店、1993、 p. 8.

７略号

略号を使用する場合には、初出の際にそれ以後略号によって示す旨を明記して下さい。

例： Œuvres Complètes（以下 O.C.と略す）

８くり返して参照する場合の略号

註などにおいて、くり返して同じ文献を参照する場合、直前のものと同じ場合は「同前」、いくつか前の註に挙げられた文献の場合は、「著者名、前掲書」とします。

例：(14) 山田太郎『日本語論』言社出版、二〇〇七年、二一一頁。

(15) 同前、二三二頁。

---

(23) 山田、前掲書、三〇頁。

3.2 英文の引用・英語文献表記（特に記載のない点については和文に準じる）

１引用

英文を引用するときは“ ”の記号を使います。ピリオドやコンマが続く場合は“ .”“ ,”のように引用符のなかに入れます。また、引用文の一部を省略するときには …のようにピリオドを３つ使います。引用が 3 行以上にわたるときは、改行・インデント（10 字分）にしてまとめて引用します。

２作品名・雑誌名

イタリック体にします。題名にある最初の単語、および冠詞・前置詞・接続詞を除くすべての単語の一番目の文字を大文字にして下さい。

例：The Souls of Black Folk

３雑誌所収論文・詩集所収の詩・章の題名など

“ ”に入れ、大文字・小文字の区別は上記の規定に従って下さい。

例：“Intimacy and Affliction: Du Bois, Race, and Psychoanalysis”

４単行本への参照

記載する単行本の詳細情報は、執筆者名（姓・名の順）、刊行地名、出版社名、刊行年、頁数の順とします。

初版の刊行年が違うときは、題名の後に入れます。編集者、翻訳者がある場合は、題名の後に Ed. （編集） Trans.（翻訳）の略号とともに記載します。

例：Du Bois, W. E. B. The Souls of Black Folk. 1903. Ed. Henry Louis Gates Jr. New York: W.W. Norton, 1999.

５雑誌論文等への参照

執筆者名、論文名、収録雑誌名、巻号、出版社名、刊行年、頁数の順とします。

例：Coviello, Peter. “Intimacy and Affliction: Du Bois, Race, and Psychoanalysis.” Modern Language Quarterly 6.3 (2003): 1-32.

６くり返して参照する場合の略号

註などにおいて、くり返して同じ文献を参照する場合、直前のものと同じ場合は Ibid.、いくつか前の註に挙げられた文献の場合は、「著者名, op. cit.」とします。

例：(14) Du Bois, W. E. B. The Souls of Black Folk. 1903. Ed. Henry Louis Gates Jr. New York: W.W. Norton, 1999.

(15) Ibid., p. 34.

---

(23) Du Bois, op. cit., p. 42.

ただし、同一著者の複数の著作を扱う場合は書名を再掲します。

3.3 フランス語の引用・フランス語文献表記（特に記載のない点については和文に準じる）

１引用

フランス語を引用するときは« » (guillemets)の記号を使います。«»と引用部分との間には半角スペースが入ります。« »の中が完全な文を成すときは« .»と point を中に入れますが、引用後にそれが一つの文章として続く場合には point は必要ありません。また、引用文の一部を省略したり、説明を書き加えたりするときは、 []の記号を使って下さい。省略のための点の数は三つです。

例：Bref, « le conscient sort de l'inconscient et y rentre », et Herzen y voit « la condition du développement mental ».

例：En 1927, [...] Hemingway venait de publier un roman.

２作品名・雑誌名

イタリック体にします。最初の名詞（その前に冠詞、形容詞がある場合はそれらも）は、一番目の文字を大文字にして下さい。但し、題名の表記に特別な意味のあるものはこの限りではありません。

例：*Les Essais*

３雑誌所収論文・詩集所収の詩・章の題名など

フランス語のものは« » (guillemets)に入れ、大文字・小文字の区別は上記の規定に従って下さい。

例：« Les Petites Vieilles » dans Les Fleurs du Mal

４単行本への参照

執筆者名、書名、刊行地名（パリ以外は記載）、出版社名、（叢書名）、刊行年、頁数の順とします。頁数は、単数の場合は、p.（頁との間に半角スペースを入れる)、複数の場合は pp.とします。

例：Michel Foucault, Surveiller et punir, Gallimard, « Bibliothèque des Histoires », 1975, pp. 202-203.

５雑誌論文等への参照

執筆者名、論文名、収録雑誌名、巻号、出版社名、刊行年、頁数の順として、雑誌名の前に in をつけます。

例：Gérard Genette, « Avatars du cratylisme », in Poëtique, 11, Seuil, 1972, p. 370.

６くり返して参照する場合の略号

註などにおいて、くり返して同じ文献を参照する場合、直前のものと同じ場合は Ibid.、いくつか前の註に挙げられた文献の場合は、「著者名, op. cit.」とします。

例：(14) Gérard Genette, Fiction et diction, Seuil, « Poétique », 1991, p. 23.

(15) Ibid., p. 34.

---

(23) Genette, op. cit., p. 42.

ただし、同一著者の複数の著作を扱う場合は書名を再掲します。

3.4 ドイツ語の引用、ドイツ語文献表記（特に記載のない点については和文に準じる）

１引用

ドイツ語を引用するときは „---“ の記号を使います。„---“の中が完全な文を成すときは„---.“と Punkt を中に入れますが、引用後にそれが一つの文章として続く場合には Punkt は必要ありません。また、引用文の一部を省略したり、説明を書き加えたりするときは、 [ ] の記号を使って下さい。省略のための点の数は三つです。

２作品名・雑誌名

ドイツ語文献を主要な対象とした論文では、過去には英仏語等とは違ってイタリック体にしないのが原則でした。しかし近年はこの原則も変わってきており、また分野によって多言語の文献を並べてあげる場合などこの原則から外れる場合もありますので、関係する学会の雑誌の論文等を検討してみてください。

３単行本作品への参照

執筆者名、書名、刊行地名、出版社名、刊行年、頁数の順とします。執筆者名は、 a) 名・姓の順で間にカンマを入れない、b) 姓・名の順で間にカンマを入れる、のどちらかに統一します。編集者がある場合は、題名の後に Hrsg.（編集）の略号とともに記載します。

頁数は、単数・複数の場合とも、S.（頁との間にスペースは入れる／入れない双方の流儀がある。論文内では統一する。)とします。複数頁では最初と最後の頁を指示する他に、2 頁連続で参照するときは f.、3 頁以上の参照なら ff.を付ける方法もあります。参照の最後には Punkt をつけます。また書名に副題があるときには、一旦 Punkt で止めて副題を続けます。なおドイツ語の文献記述では、刊行地＋出版社と刊行年の間はスペースのみで、カンマ等を入れません。出版社はカッコでくくるか、コロンで刊行地と繋げます。

例：Christa Wolf: Sommerstück. Berlin u. Weimar (Aufbau) 1989, S. 171.

Wolf , Christa: Sommerstück. Berlin u. Weimar: Aufbau 1989, S. 171.　などの書き方もある。

４雑誌論文等への参照

執筆者名、論文名のあと Punkt で止め、In: の後に、収録雑誌名、巻号、刊行年、頁数の順とします。論文の場合、まず掲載頁をすべてあげ、特に参照すべき頁はその後別にあげます。

例：Frank Möbus: Des Plutus zwiefache Rede. Eine kritische Bibelanspielung in Mummenschanz des Faust II. In: Zeitschrift für deutsche Philologie, 107. Band (1988) Sonderheft, S. 71-84, hier S. 78f.

５論文集等収録論文への参照

執筆者名、論文名のあと Punkt で止め、In: の後に、収録書名、刊行地名、出版社名、刊行年、頁数の順とします。

例：Reinhart Meyer: Das Nationaltheater in Deutschland als höfisches Institut. Versuch einer Begriffs- und Funktionsbestimmung. In: Das Ende des Stegreifspiels, die Geburt des Nationaltheaters. Hrsg. von Roger Bauer u. Jürgen Wertheimer. München (Fink) 1983, S. 124-152, besonders S. 149, Anm. 26.

６くり返して参照する場合の略号

註などにおいて、くり返して同じ文献を参照する場合、直前のものと同じ場合は「Ebd.」（文頭でない場合は ebd.）、いくつか前の註に挙げられた文献の場合は、「著者名: a,a,O.」とします。

例：(14) André Jolles: Einfache Formen. 5. Aufl. Tübingen (Niemeyer) 1974, S. 217ff. (15) Ebd., S. 220.

…

(23) Jolles: a.a.O., S. 223.

ただし、分かりにくいと思われるときは、

Jolles: Einfache Formen, S. 223.

などとする場合もよくあります。（長い書名の場合最初２、３単語を書き、「...」をつけます。）

※ドイツ語表記に関してさらに細かいことが気になるなら、Georg Bangen: Die schriftliche Form germanistischer Arbeiten. 9. Aufl. Stuttgart (Metzler) 1990.等を参照のこと。これは標準的な参考書です。

3.5 ロシア語の引用、ロシア語文献表記（特に記載のない点については和文に準じる）

（作成中）

3.6 中国語の引用、中国語文献表記（特に記載のない点については和文に準じる）

１原文引用の漢字体、標点符号

引用の漢字体は当用漢字体を基本にしますが、当用漢字が、中国語簡体字もしくは繁体字と判別できないほど著しくかけ離れている場合は、旧字体（本字体）を用いること。JIS で対応できる限りで、全文を旧字体（本字体）に統一することは構いません。

例：【×は用いてはならない例】

転○／轉○、専○／專○、后（後の簡体字として）×／後○ 谷（穀の簡体字として）×／穀○、干（乾の簡体字として）×／乾○ 面

（麺の簡体字として）×／麺○、応×／應○

中国語原文の引用は基本的に日本語引用と同じです。「“”」（引用号）は用いず、カギカッコ「」を用います。原文にあるコロン、セミコロンはそのまま使用して構いませんが、縦組みの場合は縦書きになります。

２書名・雑誌名・作品名のカッコと表記

いずれも原文題名のみの提示を原則とします。単行本、逐次刊行物は二重カギカッコ『』、単篇の作品名はカギカッコ「」に入れます。必要な場合は、訳題名をそれぞれの後ろに置いたパーレン（） 内に、上記と同様のカッコの区別にて記します。篇章名は書名『』の外に出します。「章句」「篇」などの名称は省略して構いません。同一章が更に上下などに分かれる場合、章名と上下などの間にナカグロ「・」を入れます。

例：『論語』泰伯 『史記』項羽本紀 『荘子』斉物論 『礼記』繫辞・下 『孟子』万章・上

３単行本への参照

冒頭に執筆者名、次に『』の中に書名を記します。副題は全ダッシュ一つ「—」でつなげます。その後にパーレン（）を置き、中に、叢書名（「」に入れます。叢書に編集者がある場合、「」の前に記します）、出版社名、刊行地名、刊行年月、の順に記します。初版（第一版）以外の版、または初印（第一次印刷）以外の版を用いた場合は版次も記すこと。それぞれのデータの間は「、」で区切ります。出版社名に地名が含まれている場合（例：上海文芸出版社）は、刊行地名は省略します。頁数は（）の外に出します。

頁数は、書誌情報を記したパーレン（）の後ろに、「、」を入れて記します。縦書きの場合、漢数字および漢字「頁」を用い、参照箇所が複数頁に及ぶ場合は「二三～二五頁」のように間を「～」で結び、終了頁にのみ「頁」を記します。頁数で注記が終る場合、句点「。」は置きません。

例：陳永志『霊魂溶於文学的一群—論浅草社、沈鐘社』（銭谷融主編「中国新文学社団、流派叢書」、華東師範大学出版社、上海、一九九五年四月）、一九六～一九九頁

４逐次刊行物所収作品、論文などへの参照

中国語の、逐次刊行物（雑誌、新聞、集刊類）に掲載された作品、論文などは、冒頭に作者名を記し、次に題目をカギカッコ「」に入れ、その後ろにパーレン（）を置き、中に上記に従い逐次刊行物名を記します。雑誌の号数表記は、オリジナルの表記に従い、その結果として文中で「期」「号」

「月号」などが混在しても構いません。号数の後に、「、」を打ち、刊行時期を記します。雑誌については「月」まで、新聞および半月刊、週刊などは「日」まで記します。民国年数のみを記すことはせず、民国年数の後の（）内に西暦を併記します。（）内の西暦年数の「年」は省略します。

例：民国一八年（一九二九）

頁数は、書誌情報を記したパーレン（）の後ろに、「、」を入れて記します。縦書きの場合、漢数字および漢字「頁」を用い、参照箇所が複数頁に及ぶ場合は「二三～二五頁」のように間を「～」で結 び、終了頁にのみ「頁」を記します。頁数で注記が終る場合、句点「。」は置きません。

例：何言宏「二十世紀九十年代以来中国文学的語言資源」(『人文雑誌』二〇〇四年第四期、二〇〇四年四月)、二三～二五頁

５くり返して参照する場合

註釈で、くり返して同じ文献を参照する場合、書名と頁数のみ掲げます。欧文文献の習慣は用いません。

3.7 朝鮮語の引用、朝鮮語文献表記（特に記載のない点については和文に準じる）

１引用

本文の中で朝鮮語の文を引用するときは“”を用いることとします。ただし、日本語の訳文の後に朝鮮語の原文を挙げるときは、丸括弧（）で前後を囲むだけでよろしい。句読点は「、」「。」ではなく、「, 」「. 」を用います。それ以外は和文の引用に準じます。引用文の前後を開行する場合も、和文のやり方に準じます。

２作品名・雑誌名

『』に入れます。

３雑誌所収論文

「」に入れます。

４人名

歴史的人名、著名な人名、および引用元の表記が漢字でなされている場合は、漢字表記でよろしい。それ以外の場合で、引用元ないし言及先の人名がハングル表記であれば、日本文ではカタカナで表記します。無理に漢字に直す必要はありません。人名をカタカナ表記する際には、姓と名の間を全角中黒（・）で結び、その他は和文のやり方に準じます。

例：李舜臣 ペ・ヨンジュン

５単行本への参照

和文のやり方に準じます。年号は西暦を用います。

６雑誌論文への参照

和文のやり方に準じます。年号は西暦を用います。

７略号、およびくり返して参照する場合

和文のやり方に準じます。

８参考文献、引用文献での表示

文末の参考文献ないし引用文献で朝鮮語の書籍を表示する際には、著者名を反切表（カナダラ表）の順に並べ、おなじ著者の場合は、刊行年の古い順とします。

４◆Microsoft Word で原稿を作成する場合の注意

ヒント印刷時に縦書きにする場合は、原稿も縦書きで提出して下さい。その際に数字は原則漢数字とし(2.1 の 3 も参照)、註はアラビア数字で入れますが、うまく数字を縦に出来ない場合は横のままでも結構です。アルファベットについては、縦書きの中で横書きに表示させるときは半角、縦のまま表示させるときは 全角で入力して下さい。

日本語と欧文を混在させる場合など複数言語を用いる場合は、それぞれの箇所を何語で書いているかを表示する機能があります。(標準的には下の「ステータスバー」に表示される)。この言語を後から修正することもできますので、正しく設定することで、引用符なども各言語の様式に合わせることが出来ます。

図版のサイズについて：極力画質のよい元データを用意します。大きめに載せるのに一辺が 200 ピクセル（画素数）などの低解像度の画像では、仕上がりがぼんやりした感じになります。ただし、一定限度を越えてあまり高解像度の画像を使っても仕上がりは変わらないのにファイルサイズが無闇に大きくなり、送付等に困難が生じます。通常は、長辺が 1280 ピクセル（画素数）あれば十分ですので、あまり大きい画像はソフト的にリサイズ（縮小して画素数を小さくする操作）をした方がよいでしょう。